

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520833

研究課題名（和文） 日本の船大工と木造船の現在－伝統技術の今を記録する

研究課題名（英文） THE CRISIS IN TRADITIONAL JAPANESE WOODEN BOATS AND BOAT-BUILDERS

研究代表者

出口 晶子（DEGUCHI AKIKO）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：00268385

研究成果の概要（和文）：今、日本の木造船が危ない。伝統技術をもった船大工のほとんどが 70 代後半から 80 代となり、後継者が育たないまま、腕のある作り手が急激にいらなくなっている。日本は世界のなかでも特色ある木造船文化を継承しながら、今、その文化が消えようとしているのである。本研究プロジェクトでは、この終焉期にある日本の船大工の暮らしの民俗と木造船の技術の現実に正面から向き合ってきた。現役船大工による木造船の建造工程や、船造りにかかわる諸職の暮らしを詳細に調査記録し、日本の木造船の技と文化を保存継承するための諸条件について実地に考察した。

研究成果の概要（英文）：Now, traditional Japanese wooden boats and wooden boat-builders are crisis. Most of the traditional boat-builders have reached their 80's from the late 70's without successors, so that the number of the skillful boat-builders have been decreasing rapidly. While Japan has inherited the most distinctive wooden boat-culture in the world, it has been becoming extinct. In this research project, I faced the actualities of the Japanese wooden boat-techniques and the folk customs of boat-builders' lives .

I investigated the construction processes of the traditional wooden boats and examined the lives of the boat-builders and other associated workers in detail. And I practically considered the conditions to inherit and preserve the skills and cultures of traditional Japanese wooden boats.

.交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：物質文化

## 1. 研究開始当初の背景

今、日本の木造船が危ない。伝統技術をもった船大工の大半が 70 代後半から 80 代とな

り、後継者が育たないまま、急速に作り手がいらなくなっている。1980 年代には全国の博物館で木造船の保存取蔵が進み、現物はある程

度残されたものの、技能をもった船大工の養成はその後ほとんど着手されることはなかった。2000年初頭になるまで船大工の全体的な実態調査すら手をつけられることはなかったのである。当時全国で300人あまり、各県で数名の段階にまで減少した船大工は、この数年でも一層減少していることが明らかである。関連諸職もそれと同様、あるいはそれ以上に衰微している。

調査対象者となる現役船大工たちの年齢に鑑みれば、せいぜいここ数年が、良質な記録の見込める調査期間である。よって現地調査は、一刻も早い着手が必要であり、先のぼしにはできない状況にある。

他方、列島の木造船終焉期における木造船技術の包括的で詳細な現地調査記録はこれまでになく、今後その学術的重要性はますます高まることが予想される。なによりも木造船終焉期にありながら、現実に建造を続ける船大工の存在とその技術は、未来への文化継承につながる最後の可能性を担っている。

日本列島の木造船技術は、アジア世界の類似性を保持しつつ、世界的にみてもきわだった特色をもつ。その木造船文化の衰退で直面するさまざまな窮状を打開し、賢明かつ現実的な文化継承の保証に役立てるためにも、日本の船大工と木造船のリアルタイムな実態を現場に立ち、詳細に記録し、資料化することが必須である。

これまでの研究実績と実践的な記録・保存の方法を活かし、ここに日本列島の船大工と木造船に関する等身大の今を伝えるはじめての総合的学術調査研究が実現した。

## 2. 研究の目的

兵庫県相生のペーロンや赤穂市坂越の船祭り、宮島の管弦祭など祭礼行事に使われる船、四国・四万十川や新潟・荒川など川漁の船、岩手・狛鼻溪や熊本・球磨川などの観光船や能登・青森の磯船などは、今も木造船が求められ、新造される機会がある。ただし、後継者のいない船大工がほとんどであり、またたとえ後継者がいても、修業を可能にするだけの建造機会が乏しい今日では、その技術育成はいたって難しい。

たとえば、2012年3月国の重要無形民俗文化財になった坂越の船祭りには、伝統的な木造船が渡御に使われるが、その船大工は80代の高齢であり、後継者はいない。島根県美保神社の神事に使われる諸手船は、40年に1回、造り替えることが慣わしとされるが、1978年の新造に従事した船大工はその直後に廃業し、30年以上たった今日、次をいかに手立てするかが課題となっている。

近在に船大工がいなくなった場合、ひとつには遠方の船大工に発注して、図面をもとに造ってもらう方法がある。たとえば、奈良県

猿沢の池の船は兵庫県坂越の船大工が、京都の社寺の船は琵琶湖の船大工が手がけるなど、受注関係が広域化し、技術が寄せられていく傾向がみられる。

他方、川漁などに使われる船では、遠方の専門の船大工に発注することなく、在地の家大工や指物大工が見様見真似で、自作する。多少の不都合や不細工は承知のうえで手近に対処する方向であり、新潟県荒川、秋田県米代川、京都府由良川のアユ漁に用いる川舟などでは、そうした展開が認められる。また木造船の上にFRP(強化プラスチック)を巻き、樹脂で固めて延命する方法もあちこちでみうけられる。かれこれ50年近くこの方法でしのいでいるところがある。

本研究では、船大工不在時代にあらわれるこうした局面を直視し、木造船の技の在り様をつぶさに調査記録するのが主眼である。方法は2002年の全国規模の船大工の存在確認調査を軸に、その後の変化と未調査地点を確認しながら、新造・修復を続ける現役船大工と現役船に焦点をしばり、建造技術の工程記録や生活習俗の観察・聞きとり調査を実施した。また、保存の緊急性の高い木造船については博物館への橋渡し等、具体的手だてを講じながら、未永く生き残る可能性の高い木造船技術の諸条件について実地に考察した。



赤穂市坂越の船祭り 写真=出口正登  
坂越湾内を伝統の木造船で船渡御し、生島に渡る

## 3. 研究の方法

### (1) 調査内容

主に以下の内容で現地調査を実施した。

- ① 全国の現役船大工の造船状況について、最新状況の追跡調査
- ② 釘、マキハダ、漆、ノミ、材木など関連材料の調達にかんする追跡調査
- ③ 現役船大工の生活習俗ならびに建造記録、現役木造船の利用実態の現地調査とその多角的検討
- ④ 緊急性の高い木造船の保存への実践的記録調査
- ⑤ 将来性のある木造船建造への実践的記

## 録調査

### ⑥博物館等における各地の木造船の保存実態と実測調査

#### (2) 調査地選定の留意点

現地調査地は以下の留意点を重視し、緊急性に応じて柔軟に選定した。

- ① 現役船大工の活躍がみられる場所
- ② 船大工はいないが、現役の木造船が利用されている場所
- ③ 生業と結びついた漁船のほか、祭り、観光や社寺仏閣の行事などであえて木造船が選びとられ、存続している場所

#### (3) 調査対象

上記の内容と留意点にもとづき、現地調査記録を実施した対象は主に下記のものである。

- ① 青森の磯船と岩手の川舟
- ② 秋田のカタブネ・マルキブネ
- ③ 新潟の川舟と佐渡のタライ舟
- ④ 北陸・舞鶴のテンマ船
- ⑤ 東京湾のベカ
- ⑥ 岐阜長良の川舟
- ⑦ 諏訪湖のマルタブネ、琵琶湖のマルコブネ
- ⑧ 出雲のモロタブネ、隠岐のトモド
- ⑨ 中・四国の祭礼・競漕船と川舟
- ⑩ 熊本の帆引き網船と川舟
- ⑪ 種子島のテンマとマルキブネ
- ⑫ 奄美大島のイタツケとサバニ
- ⑬ 沖縄諸島のサバニなど

## 4. 研究成果

### (1) 船大工不在時代の現況

川漁や磯漁、観光遊覧、祭りや船こぎ競争、古式泳法の水練などでは、いまでも木造船をよしとし、おりあいがつけられるならば今後も新造していただける機会がある。とはいえ、従来の諸職間のつながりが途絶えた今日、どこともが末永い木造船継承に不安や課題をもっている。

木造船を造ってほしいが、どこにどのように頼めばよいかわからない／FRP（強化プラスチック）を巻いてもたせてきたが、どこまでこのやり方でやっていけるのか、地元の船大工はとうにいない／船大工はいるが、船釘がない。船釘をどうやって調達すればよいか／鋸の目立てができる職人、船材が挽ける製材所が近くにない／マキハダ（水密を保つヒノキの内皮を加工した充填材）、木材の調達が在地では難しくなった／息子に手伝わせたいが、食べてはいけな、どうしたものか、といった内容である。

こうした事態が進むことによって、遊漁船などでは専門の船大工の手を離れ、素人仕事

で間に合わせる傾向が進行している。伝統技術の崩れもやむなしとする事態である。

一方、観光船や行事船、学校での練習船などではより確かな技術をもとめ、遠方へ発注がかけられるケースも発生している。これにより生き残る船大工は経験したことのない広域のニーズにこたえるだけの力量が求められている。それは船大工のみならず、関連する諸職、たとえば鋸の目立てや船釘なども同じ状況であり、木造船継承における今日の高いハードルとなっている。

### (2) 新たな文化継承の取り組み

#### ① 船大工間の広域連携

では、船大工の高齢化や材料不足を補ってより確かな技術をいかに次代に継承していただけるのだろうか。おりしもそのモデルケースとなったのが、学校教育現場（開成学園）で古式泳法伝授に使われてきた木造船の新造プロジェクトである。同学園の水泳部では老朽化した木造船を2艘新しくするため、1艘は合宿所のある千葉・館山近在の船大工の手で、もう1艘は在地とは異なる日本海沿岸のテンマ船を新造することになった。後者には舞鶴のナリウテンマが選ばれ、8代続く木造船所の老棟梁が建造する予定だったが、体調をくずしたため造船所に残る古い板図と老棟梁の伝授のもと、富山県氷見の船大工が建造作業を手掛けることになった。すなわち板図と現物計測、老船大工の助言により他地方の若手船大工が実践するという取り組みである。船大工の世界は60代でも「若手」であり、これは木造船終焉期の技術継承のモデルケースとなった。本研究では材木調達から立ち会い、建造の全記録と完成した船の利用調査記録も実施した。その一報は論文「生徒たちの木造船」にまとめた。



#### 船大工どうしの連携

70代の舞鶴の船大工・和田崇氏（左）から60代の氷見の船大工・番匠光昭氏（右）へナリウテンマの技術が継承される。舞鶴の造船場にて



ナリウテンマの釘うち作業  
氷見の造船場にて



完成したナリウテンマとともに

## ②地域や学校教育との連携

学校教育や地域との連携は上記の例にとどまらない。在来の木造船を新造し、乗船や櫓こぎの操船を児童に経験させる取り組みや船こぎ祭りの復活は数多くないながら各地でみいだせる。たとえば、福井県おおい町の大島ではマルキブネを用いた船漕ぎ競争「とうしあい」が復活して10年以上になる。「大島の伝統文化を守る会」が中心となって郷土文化の要となるよう、近在から使われなくなったマルキブネやテンマ船を少しずつ集め、補修を重ねてきた。末永く使えるよう保管庫も整備されている。毎年地元の小学生が参加して、地域の老若男女による乗船体験と競漕が開催されている。

ペーロンがさかんな奄美や観光川下りで知られる熊本の球磨川では高校生たちによる木造船造りの体験プロジェクトも進んでいる。教育・祭り・観光というつながりのなかで木造船文化の継承は実践されており、今後は一層この3つのより糸が木造船を引き継

ぐ大きな柱になると思われる。



子供たちのマルキブネ乗船体験\*  
福井県おおい町大島の船漕ぎ競争「とうしあい」会場にて \*印写真=出口晶子

## ③観光船にみる戦略的取り組み

近年、河川観光舟運の隆盛とあいまって、川では木造船継承のための戦略的取組みがみられ、建造の安定・復活のきざしがある。岩手の狛鼻溪や埼玉の長瀬峡などでは船頭みずからが観光閑期の冬場に木造船を製作し、需要を自前でまかなうしくみがある。さらに岐阜市では、鶺鴒観覧船の木造船所を市で営み、2010年3月には船大工を市の無形民俗文化財に指定している。建造現場ではベテラン棟梁が30代、50代の後継者を育成しながら、積極的にその作業工程を観光客にも見せていく場が用意されている。また岩国の鶺鴒観覧船の建造をも手掛けるなど、地元にとどまらない広域連携を実現している。

一方、都会の河川では桜見舟など木造船観光が人気を博す。浦安では木造船の工房が博物館の一角にあり、その建造現場をつぶさに見学することができる。人口の集中する都市部でこそ観光とつながる木造船は、一定の需要が見込まれ、生き残るチャンスがある。



岐阜市営の鶺鴒観覧船造船所\*  
ここでは若手船大工とベテラン棟梁が一緒に作業し、建造技術を継承している



模型を手に語る浦安の船大工・宇田川彰氏  
浦安市郷土資料館の木造船工房にて

#### ④震災復興と新たな需要

青森県の太平洋岸沿い、階上町一帯は全国的なかでも現役で木造の磯船が利用されている稀有な場所である。一帯は、2011年3月の東日本大地震の影響で木造船が流出する等の被害があった。岩礁の発達した地先の海は磯物の宝庫であり、伝統の木造船が欠かせない。そこで近年から中古木造船を譲り受け、地先の海に適するよう、改造修理をくわえて約半年でアワビ漁再開にこぎつけた。すなわち船小屋に眠っていた木造船が震災という非常時を経験して再び日の目を見、新たな場所で活用されていく実態が浮き彫りになっている。「木造船でなければだめ」という文化はこうした危機的状況下でむしろ目に見える形となって発揮されるのである。



青森県階上町の磯船ホッツの修繕\*  
譲りうけてきた船は家大工によって補修されていく。地先の磯場にはムダマ造り（船底に割りぬき部材をもつ木造船）のホッツがよい。持ち主の上平親子も手伝って作業を急ぐ

#### (3) 保存と記録の役割

##### ①最後の一本釣り漁船

和歌山では木造船建造の最末期である1970年代に造られた一本釣り漁船が数隻残されていた。その1艘を搭載漁具とともに博物館保存できるよう橋渡しし、持ち主（濱田

和夫・和隆親子）から詳細な記録調査を実施した。船は神戸大学海事博物館に保存され、これにより将来的に貴重な資料となる木造船最末期の技術をあらわす有形民俗文化財の消失はまぬがれた。また付随道具・調査記録をふくめて現物を後世に伝える道が確保された。

数艘和歌山の由良一帯に残っていた一本釣り木造船は、現地では相前後して廃棄・消滅し、現在は博物館にある下記写真の船が、最後の実船となった。



和歌山の一本釣り木造船\*  
由良町網代の港にて現物を実見する。持ち主の濱田和隆氏（奥）と神戸大学海事博物館前館長石田憲治氏（手前）

##### ②聞き書き・写真記録と今後の課題

八丈島、竹富島、西表島、見島などの離島においては、木造船技術の継承は途絶えているものの、その確かな記憶をもつ伝承者は生きている。また八代の帆引き船など独自の漁法と結びついたところでは木造船が今日でも使われる地域がある。それらの聞き取りならびに活動の写真記録、図面・現物等を保存し、資料化の道を確保することは重要である。

日本の木造船技術の将来は、ここ数年の活動実践が未来を大きく規定すると予測される。巖島では船祭りに求められる櫓漕ぎの技の習熟を、新たに始まった櫓漕ぎ観光船の日常が保証しているように、観光・祭り・教育を軸とした、その有機的な連携による戦略的な取り組みの有無が、今後、日本の木造船の存廃を二分していくと思われる。そのため、地域の窮状に照らし、学術見地にもとづく適切な助言と実践的な記録研究は、ひきつづき推進していく必要がある。

また徹底した現地調査によってこれまでに築きあげてきた文字、音声、写真、図面等、木造船に関する膨大なデータベースはそれ自体が一級の文化財である。その学術価値は今後ますます高まることになる。一級の学術調査記録を後世に良好な形で継承していくためのデータベース化の方策は、今後一層強力に推進していく。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 出口晶子: 文 出口正登: 写真、見島の鬼ようず—天空の睨み、やまかわうみ 5、2012、150—157、査読無
- ② 出口晶子: 文 出口正登: 写真、円山川を渡り、玄武洞にいたる、やまかわうみ 3、2011、166-172、査読無
- ③ 出口晶子: 文 出口正登: 写真、舟の通り路・近江八幡一田と瓦と内湖の関係、やまかわうみ 2、2011、171-179、査読無
- ④ 出口晶子: 文 出口正登: 写真、人形になったウミ—琵琶湖・淀川、やまかわうみ 1、2011、194—201、査読無
- ⑤ 出口晶子、生徒たちの木造船—ナリウテンマ新造記、甲南大学紀要(文学編) 161、2011、277—287、(写真・出口正登)、査読無
- ⑥ 出口晶子: 文 出口正登: 写真、瀬戸内の海・山越えて、やまかわうみ創刊準備号、2011、160—172、査読無

[学会発表] (計 3 件)

- ① 出口晶子、淀川舟運の今昔、企画展記念公開講座 2012年3月18日 枚方市鍵屋資料館
- ② 出口晶子・出口正登 マルキブネを知ろう、大島の伝統文化を守る会、2011年8月23日、おおい町大島漁港とうしあい会場
- ③ 出口晶子・出口正登 マルキブネの歴史、大島の伝統文化を守る会、2010年8月24日、おおい町はまかぜ交流館

[図書] (計 1 件)

出口正登編著、出口晶子著、昭和堂、琵琶湖周航—映像地理学の旅、2010、327

[その他]

関連新聞記事

湖上に「丸子船」復活の夢 に出口晶子のコメント掲載 読売新聞(滋賀版) 2011年1月4日 新春特集

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

出口 晶子 (DEGUCHI AKIKO)  
甲南大学・文学部・教授  
研究者番号: 00268385

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

出口 正登 (DEGUCHI MASATO)  
フィールド写真家・甲南大学 KOREC 地域連携プロジェクトフィールド写真講座講師  
船の建造と民俗の写真記録を担当。

現地調査では、全国各地の船大工と船主、木造船所蔵機関等の協力をえた。ことにナリウテンマ新造では開成学園水泳部 OB 会(油屋会)、和歌山の一本釣り木造漁船の保存では神戸大学海事博物館、マキハダ行商船の調査では海の博物館、トモド調査では隠岐・焼火神社等の協力をえた。